

## ネエ ダンナサン あるいは壇

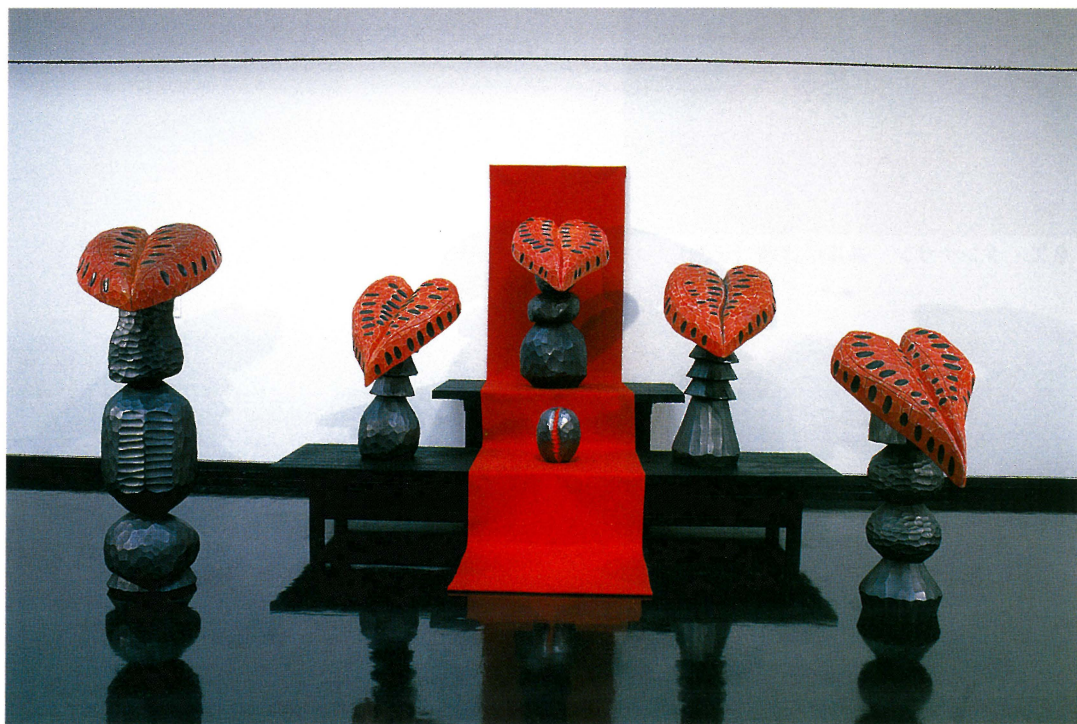
|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 阿部 典英   |
| 雑誌名 | 生涯学習研究と実践 : 北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要  |
| 巻   | 2   |
| ページ | 1-4   |
| 発行年 | 2002-01-15  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002411/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002411/</a> |

## ネエ ダンナサン あるいは壇

“I Say, Sir”, or “Tiers”

阿 部 典 英

Norihide ABE



- ・題 名：ネエ ダンナサン あるいは壇
- ・制作年：2001年
- ・材 料：木(シナ、セン)、黒鉛、ラッカー、アクリリック、フェルト
- ・大きさ：350×400×220cm



・ネエ ダンナサン あるいは壇 (正面)



・ネエ ダンナサン あるいは壇 (向って左側部)





・ネエ ダンナサン あるいは壇（向って右側より中央部）

## 『ネエ ダンナサン あるいは壇』を出品した展覧会について

阿 部 典 英

今年の夏は例年になく冷夏であったが、私個人としては大変あつく燃えた夏であった。それは北海道内の抽象系の立体表現を主として発表している作家が一堂に会して『北海道立体表現展』を開催したからである。開催するにあたっては会場確保、PR広報活動、経費負担等と全てのアートマネジメントを作家が負うというかなりハードな作業に加え、一番の重要な作品制作をその間にしなければならないという状態であった。28名の作家によって平成13年9月1日～9日（1日休館あり）まで北海道立近代美術館で開催され8日間で1,830名の入場者があった。なんと1日平均200名を越えたのである。たかが1日200名という数字であるが、美術館で行う貸し館のこうした展覧会平均入場者数は150名程度と聞いている。従ってその平均を一日なんと78名をオーバーした数なのである。加えてまだ一般市民には馴染みが薄い抽象系の作品にもかかわらず好評であったと自負している。

この展覧会をどうして開くことになったのかを少し述べてみたい。

隔年で開かれていた札幌彫刻美術館の『北の彫刻展』が2000年の10回目で終了することになった。この2年前にすでにこの様な立体造形だけの全道的な大きな展覧会を是非開催したいという声があった。が、中味をどうするかという煮詰まった話までは至っていなかった。そこで10回目が終了した時点で北の彫刻展に出品していた者が中心となり話し合いが持たれ次の点が集約された。

1. 21世紀の幕開の2001年に開催する。
2. 出品作家の選定は抽象系の立体造形作家とする。
3. 出来るだけ若い作家を入れる。
4. 全道から作家を選定する。

このことを前提として作家選定に入ったが、すでに殆ど同じ年に展覧会を計画していた作家が札幌を中心に数名いることが解り、大変残念であるが彼らの参加を見送らざるをえなかった。

自薦、他薦とかなりの作家が候補に挙ったが結果28名になった。内訳は70歳代2名、60歳代2名、50歳代12名、40歳代5名、30歳代7名で平均年齢が49才となった。男25名、女3名。地域別では札幌14名、旭川3名、石狩3名、夕張2名、小樽、室蘭、釧路、江別、音更、栗沢が各1名となった。材質別では木が多く14名、石5名、鋼材4名、FPR、石膏、ブロンズが各1名、ミックスメディア2名の内訳であった。展示スペースは固定壁とその壁面で区切られた床のみとし出来るだけ広く確保することとし1人5メートル四方とした。2名は壁への展示となり床面展示者は26名となった。それぞれにまだ細かい分析をしなければならないが、いろいろな結果が得られ今後の展覧会に向けた多くの資料を得ることが出来た。

私自身の作品、『ネエ ダンナサン あるいは壇』は、木を使用している。材質はセン、シナである。イメージとしては生命力を一つの元にし、植物的、動物的に表現しえる形と造形としての形からの攻めを表現したかった作品であるが、いささか攻めあぐむことになった。